

2024. 12. 19 福島原発刑事訴訟支援団集会 島崎邦彦氏の講演と質疑応答部分の書き起こし
<https://youtu.be/YXZaeoCKoZo>

0 : 31 : 55

【講演】

まあ、とりあえずこういう題にしましたけれども。

これはたまたま昨日ですね、18日。あちこちで集団訴訟があるんだと思いますけれども、それが出てきましたので、おやっと思って早速使わせていただいた。確か京都だったと思うんですけども。こういうあちこちで、おそらく皆さん、ここにも活躍されてる方がいらっしゃるんじゃないかと思えますけれども。

というわけで、あちこちで多分集団訴訟がされてるんだと思いますけれども、たまたまこれが見つかりましたので、ちょっとそういう活動の一つがこんな形になって、国の責任を認めずというのは、これはもう全然おかしいと思えますけれども、とりあえずこんなふうになっていたというので。

それで、皆さんお分かりだと思えるけれども、多くの方が忘れていることがあると私は思っています。それは簡単なことです。日本は地震国なんです。当たり前と思われるかもしれないけれども、これ実は当たり前じゃないんですよ。これがキーなんです。と僕は思ってます。

みんな忘れてるんですよ。地震が起きたときは、もう大変だ大変だといって、慌てられる。問題になる。どうしようかいろいろ考えるけれども、結局、というところちょっと語弊があるかもしれませんが、何もしないんです、はい。終わったら。ああ、ああ、あれは大変だったねっていうこと。

こういう、地震慣れしてるんでしょうかね。どういうことなのか僕にもわからないんですけども、これが実はキーなんですよ。

それで今日のお話は、長期評価はいかに科学的に信頼できるものかっていうことと、それから津波対策をしなくちゃいけないという結論がすでにあったということを中心にお話しすることになっています。

それで原発っていうのは輸入品なんですね。日本が自分でつくったものじゃないんです。できてるものを買ってきたっていうのは変ですけども、そういうものに過ぎないんですね。

それで、最初の発電はどうかアメリカで行われたそうです。それから商業用で最初にできた原発はロシアだそうです。どちらの国も津波なんていうことは全然考えてないんですよ。

そういうものを日本でも使えるかと思って買ってきちゃった。それが原発です。その点をまず強調したいと思ってます。

もう1年近くなりますけれども、能登半島地震っていうのは、いかに原発が危険かってい

うことを改めて教えてくれたと思っていますので、その話もしたいと思っています。私は(法廷で) こういうことを言った。もう忘れてましたけど、「長期評価に従って防災を進めておけば、18000 有余の命はかなり救われた」。それだけじゃなくて、「原発事故も起きなかった」と。今も思ってますが。ということをやったようです。

そのもとの長期評価っていうもの、あまりご存じでない方もひょっとしていらっしゃるかと思って、ちょっと詳しく書きましたけれども、もともとは、若い方はご存じないかもしれませんが、兵庫県南部地震というのが1995年の1月17日の早朝に起きました。マグニチュード7.2。マグニチュードとしては、例えば関東地震の7.8か7.9に比べるとずっと小さいですけども、6434人の方が亡くなって、いまだに3人の方が行方不明という大変な被害を起こした。この地震の経験を生かして、地震本部の方で地震の調査や研究の成果を伝える役目を与えられた。地震本部というのは地震調査研究推進本部という名前で、文科省の特別の機関となっています。

ところが、不思議なことが起こりました。横やりが入ったんです。

やろうとしてることは、学術的な討論をして最も起こりやすい、こういう地震が今起こりやすいんじゃないか。それを選び出してどう対策を進めていけばいいのか。被害が大きくならないようにということを目指していた。それなのに、なんで横やりが入るんだろう。とても不思議。

「三陸沖から房総沖にかけて」、これが今ターゲットだったんですけども、この「地震活動の長期評価について内閣府から申し入れがありました」。

内閣府から申し入れ？何だろう？

「この申し入れに対し、内閣府と幾度もやりとりをした後に、最終的に評価文の前文を添付ファイルのように修正することで収拾することになりました。」という報告が、長期評価の事務局から来ました。

内閣府の防災担当は何を言ってるかっていうのを大雑把に書きましたけれども、「長期評価の持つ社会的責任」、社会的責任があるんだと。公表の仕方についても、そんな簡単にやってもらっては困る。だから、政策委員会という別の委員会で審議しないとイケない。三陸沖北部から房総沖の、津波地震なんですけれども、こんな広い範囲をとって、「数学的には整理はしていても社会的に理解しづらい」。

一体どういうことだかわかりませんが。

極めて少ない情報量で推定している、三陸沖北部から房総沖までを一括して同じ性質を持つというそういうことを勝手に考えている、こういうふうを考えてですね、三陸沖北部と房総沖で同じような発生があるかどうかなんて全然保証できないじゃないかと。お前たち何やってんだ。こういう、これが内閣府のですね、防災担当ですよ。防災をする人がこういうことを言い出すんです。

そこでですね、三陸沖から房総沖までの評価ということを公表しようとする、その時にですね、「昨日内閣府からの申し入れがありました」。それで、その申し入れに対し、長期評価側と内閣府と幾度もやりとりをしたというんですね。それで、最終的に前文、前文ってのはいつもつけるんですけれども、まあ表紙ですね。そこに「添付ファイルのように修正する」ことで、やっと収拾、問題が収まったと言うんですが。

一段落加わったんですけれども、そこには何が書いてあるかということ、データとして用いる過去地震に関する資料が十分ない、評価結果である地震発生確率や次の地震の規模の数値には誤差がある、防災対策の検討、これにはこういった点を十分留意する必要がある、要するに、こんなものは役に立たないよという、そういうものをわざわざ付けさせられた。

実際には、7月31日に発表して、8月1日の朝に新聞報道された。その内容はですね、30年以内に20%の確率で、日本海溝沿いの三陸沖から房総沖にかけて津波地震が起こる可能性がある。地震による揺れは小さくても、津波はとんでもなく高いので警戒しないといけない。

これが2002年の7月31日に発表した我々の成果です。その後、一体何が起こったか、皆さんご存じのとおりですね。これが実に2002年なんです。2011年よりも9年前ですかね。

こういうことを見ていただくと、私たちがどういうことを、最終的には被害が少なくなるようにという思いではありますけれども、科学的にどこでどういう地震が起こりやすいのかということ、いろんな資料を求めて、場合によっては古文書まで見てですね、検討した結果なんです。

私どもはそれなりに、自信というところちょっと言い過ぎかもしれませんが、いろいろ検討して出した結果だと思っています。

ところがそれを出そうとすると、数値には誤差だとか、防災対策にはちょっと無理なんじゃないかとか、そういう余計な前文を付けられる。そういう状況にあった。これは事務局が、ある意味勝手に、勝手にというのはちょっと言いすぎかもしれませんが、やってしまうので、我々としては前文をいじるなんてことはできませんでした。

そういうものを出しているんですけれども、東電の対応は何かということ、津波地震は起こらないと言うんですね。その根拠は、津波評価技術という本が作られているんですけれども、それによると、福島沖には津波地震は起こらないという結論になります。

それでえらい人がたくさん加わって、津波評価技術が書かれていて、なるほどと信頼できるものだと思いますが、実はこの内容がひどいもので、津波地震が起こらない、その根拠は過去400年に起きていないからというだけなんです。

それでですね。電力側は土木学会という学会を利用して、学会にはもちろん電力の人も加わっているんですよ。そういうところを利用して津波評価技術という本を出す。その本の作

成のために人が集まったりなんざりして、いろいろ大変でしょうからと言って、2億円に近いお金が出たんです。2億円ですよ。何をしてるか。こういうことをするんですね。

それで400年間の歴史を振り返ると、津波地震はなかったもので、津波地震は起こらないという。そういうことを堂々と発表していた。だから何もしないという。何もしないことの言い訳ですが、でも実際にはですね、子会社に計算をさせているんです。津波地震が起こらないと自分では言っていないながら。

その結果、予想される津波の高さは、敷地は10メートルの高さにあるんですけども、15.7メートルでした。5.7メートルでもものすごい高さですからね。それは大変なことになるのはわかるんですけども、実際の津波の高さは15.2メートルでした。これでもすごい高さなんですけれども、それが2008年のことです。大災害が起きたのは2011年です。

普通はやっぱり原発を持っている、持ってるってのは変かもしれませんが、持っている人はですね。大災害に遭うことをやっぱり危険視して、少しでも守ろうとするのが普通の人情じゃないかと思うんですよ。それを2008年に知っていて。何もしなかった。

これはほんと、普通の人間じゃないと言ってもいいくらい。普通しないですよ。やっぱり危険なものを持っていて、そこに災害が来る可能性がある、可能性でもう十分ですよ。それはやっぱり防がないといけないという対策をするのが普通の人間のやることじゃないかと思うんですよ。

ところが、なんと、しなかった。2011年の3年前だから、全然間にあったわけですよ。あきれ返る。なんと言いましょうか、こういう、こういう会社が原発を持っていいんですかね。

いわゆるちゃぶ台返しの話で、多分皆さんご存じだと思いますけれども、東京電力は一時ですね、経営陣が、やっぱり津波地震の対策を進めるという方向に向かったんですよ。そのまま行っていればと思ってしまうんですが、副社長の武藤さんという方が、まるっきりそのいい方向に向かっているのをひっくり返して対策をしないことになったんです。

というわけで、ちょっと、長期評価のお話をさせていただきました。

0:48:06

それでもう一つお話ししたいのは、やっぱり能登半島の地震なんですよ。もう1年近いんですけども、お正月に起きた。これは何とですね、珠洲の原発計画っていうのがあって、1975年、反対運動をした方がいらっちゃって、ずっとされていて、ついに2003年に計画が凍結になったんです。

非常に粘り強い運動をされた方、もしここにいらちゃったら、ぜひお立ちいただいて拍手を差し上げたいって思うんですが、いらっちゃいませんか。本当に偉い方たちだと思います。

す。

これが能登半島の地図なんですけれども、ここに桃色の線がいろいろ書いてありますけれども、これは活断層だと認定されているところです。

それぞれいろいろ専門的なことが書いてありますけれども、ここでは2021年にマグニチュード5.1の地震が起きて、22年に5.4、23年に6.5で、今年のお正月になんと7.6という地震が起きました。関東地震が7.8だから9ですから、かなりのサイズの地震が起きたわけで、これはもう大変な事件で、現地の方が本当に大変でいらっしゃる。大変な事件です。

その前にも実は、6だとか6.9だとか6.5だとか5.4とか、いろいろ地震が起きておりました。それを今図に直していますけれども。そうですね、震度7という一番大きな揺れ。

この珠洲の原発計画というものを、そのままですね、反対運動を継続された偉い方たちがもしいらっしゃらないで、凍結されなくて、このまま珠洲に原発が残っていたら、ということをごちゃごちゃと考えてください。今年の正月には一体どんな恐ろしいことが起きたか。

本当に反対運動をされた方、残念ながらここにはいらっしゃらないということですが、本当に頭が下がります。凍結をするとこまで行かれたんですから、本当に素晴らしい方たちだと思っています。

これは実際に今度の地震で土地が上がったところです。右の方は2メートル、左の方は4メートルですから、珠洲がどんなに大揺れしたかということですよ。それはもう大変なことになったに違いない。

これが実際の地震の後のいわゆる余震というものですが、どこまで壊れたか、どこまで断層が動いたかを示しています。これを考えると、いかに大きな地震であったか、7.6ですからね。能登半島を越えてあんなとこまで壊れちゃったんですね。

緑色で棒が引いてありますけれども、実際のデータからどこが壊れるかっていうのを描いてみると、あんな形にしか描けなくて、場合によってはバラバラに地震が起こるように見えるんですね。ですけど、実際には全部がっぺんで壊れちゃうわけですよ。

震度が7で、大揺れはそこで起きてます。志賀原発は停止中だったんですけども、外部電源に被害が、見通しが立たないということが報告されました。

これがもし運転中だったらどうなるのか、そういうことをやはり考えてしまいます。震度7ですからね。それに備えてあったのか、運転中だったら7に耐えられるのか疑問がありますね。

もう一回また能登半島が出てきましたけれども、桃色が活断層として描かれているもので

す。で、一つ一つを見ると、そんなに長い桃色じゃないんですよ。だから、マグニチュードが7.6という大きな地震であることが、この桃色の数字から予測できただろうかと。実際にこの緑の線を描いて見ていただくと、左からいくとずっと能登半島の左側にあります。それがその先で右側に移っています。ということは、断層がジャンプしてるんですね。だから、あの緑色をつないだとしても、その次のところでジャンプしてしまって、つなげないで、普通、もし地震が起こるとすれば起こるだろうというふうを考えられてるわけですね。

そうすると、大雑把に言って、マグニチュードが6から7なんですよ。ところが、実際は7から8の地震が起きている。こういうふうに通小評価する傾向が一般的にあります。これは、どこか手を回してるのかどうかははっきりしませんけれども、小さくしたい人がいるということは明らかです。

ここで物事が飛びましたけれども、これはよく言われてる一生で100ミリシーベルトになると言われてる量ですね。

なんと言っても3.11、東日本大震災。あれが大変な事故を起こして、津波で冷却ができなくて。津波が起こるなんていうことは輸入品には書いてなかったんでしょうね。

メルトダウンが起きていまだにどうなってるのか、どうなってるのか。あのまま放ってあるとは言わないけれども、時々何かやって調査してるけど、あれ、すごい危険物なんじゃないんですか？あんなまま放っておいてどうするんですかという疑問が湧き上がってきます。

実際。災害が起きたときは外国人はよく知ってるんで、皆さん沖縄へ逃げたんだそうですよ。

排気筒から放射性物質が出てますし、福島第一原発で爆発してますので、賢い方はですね、その放射能の雨が降っては大変。雲になって空中浮かんでるわけで。それを知ってる人は真っ先に逃げたというふう聞いてます。

で、多くの人を知りたいのは、結局次の大地震がいつどこで起こるかということなんですけれども、これは残念ながら私も知りませんし、皆さんもわかりませんし、誰も知らないですね。

次の大地震は可能性としてはいつでもどこでも起こる。可能性としては、それは可能性だからね、そんなことを、という方もいらっしゃるかと思うんですけれども、可能性が0でないってことは、いつか絶対起こるんですよ。そう見るべきだと私は思っています。

起きちゃってからでは元へ戻れない。だから皆さん、本当に可能性があるということは0ではないってことで、いつか絶対起こることなんです。今、我々はその状態にあるんです。そんなことで今日ゆっくり休めますか。

それがですね、どこでも起こるとなると、原発の下でも起こるんです。いつ起こるかわからないし、原発の下でも起こるんですよ。何にもしない、放っておけば原発の下で起こる可能性があるということは0ではないので、必ずいつかは起こるんです。我々はそんな島国に

住んでるんです。

原発の下で起これば、多数の人々が死の灰を浴びてしまって大変な惨事になります。

政治家はまるっきり反対の方向を向いて、原発をつくれって言ってるんですよ。真逆ですよ。

それで今、規制委員会の中には、地震の専門家ももちろん混じっています。その地震の専門家は、あらゆることで僕と真逆の人なんです。そういう人が規制委員会を、地震の専門家として動かしているんです。それが現実なんです。

そういうことは多分皆さんご存じないし、一般の方も知らないでしょう。しかし、まさに真逆なんです。

そういう世の中にいつの間にか変わっているんですね。結局、人事権というのは非常に重要で、誰をどこに配置するかということの権力、これが全体を決めてしまう。政府が人事権を握ってしまうことがいかに恐ろしいか。

私はメンバーが真逆の人間だということを知って恐ろしくなりました。あいつがやるのが本当にそういう感じですよ。もうこれはダメだっていう、そういう感じなんです。こういうことが多分、専門家以外は多分、全然感知しないことですから、お分かりいただけないと思うんですけども、あいつか、あいつがやるのか。ええっ。どうすんのこれ。僕と真逆の人ですよ。全てに関して。はあ～。

もう、もう本当にそういう風に全て世の中が動いてんだってことですよ。本当に気絶してもおかしくないぐらいの、私としては気絶してもおかしくないぐらいの人が地震の専門家として規制委員になっているという現実。本当に恐ろしいんです。

余計な逸れ道かもしれないけど、北海道では再生エネルギー発電量がもうなんと42%に達してるっていうんですよ。このニュースを聞いて、もっと頑張れば100%になるんじゃないか。再生エネルギーで全てを賄うなんて、こんなきれいなことはないとは思ったんですけども。きれい汚いは別としてですね、可能性が十分あるってことをこれは示せると思います。

それで、前から全国のエネルギーが、実は洋上の風力発電で賄えるんだってことは言われているんですよ。だから、なぜこれをしないのか。国は洋上風力発電で全国のエネルギーを賄う、こんな格好いいことは世界に対して、こんな格好良いことはないんじゃないかと僕は思ってます。

結論は、日本は地震国なんです。原発なんか持ったら危なくてしょうがないんですよ。だからすぐさま、まずは止めないといけないし、全部廃棄しないといけない。廃棄の方法は色々あるのかもしれないし、複雑なこともあるだろうけれども、とにかく安全なものに持っていけないといけない。

もし必要であれば、コンクリートで固めたっていいから、コンクリートで固めるとですね、

その部分がまた悪くなって、さらに固めてさらに固めてって、1000年ぐらいやらないといけないというそうですけど。それでもいい、とにかく危険なものですね、安全なものに変えないといけない、そう思っています。

廃棄すると書きましたけれども、実際には廃棄の方法はいろいろ大変なこともあるかと思いますが、安全な国にぜひしていただきたいと思っています。

ちょっと早めになっちゃいましたけれども、これで終了させていただきます。どうもありがとうございました。

1:05:26

【質疑応答】

海渡:先生、この新しく規制委員になった「あいつか」というのはYさんですよね。名前はやっぱ言っちゃいけないんでしょうか。山岡耕春さんですよね。

実は脱原発弁護団はですね、山岡さんの就任に対して抗議する声明を出しております。先生のご本を読んだおかげですけども。

彼は、この原発事故が起きた2011年の3月11日の日に、これが想定外の地震だということを無理やり公表した張本人ですよね。ちょっとその辺から。

何があったか僕が話しましょうか。先生のご本に書いてあることですけども。

この日ですね、彼は当時、文科省の科学官というのをやっていて、地震調査委員会の事務局だったんですよね。それで皆さんが、先生もはじめ、これは我々が想定していた通りのものが起きた、そのことを発表すべきだというふうに言った時に、後出しジャンケンのように思われるのは良くないって、これを殺し文句のように言ってですね、阿部先生とかたくさんの先生方が、これはまさしく我々が2011年3月9日、地震の2日前に発表しようと思っていた推本の長期評価の新版そのものが起きたんだということを公表しようとしたのを押しとどめた人だったということですけど、彼はなんでそういうことをしたんでしょうか。

島崎:まず最初に思ったのはですね、3月11日の2日前だったんですよ。その時にもし言っていれば、一体どれだけの方が助かったらうか。まず、まずそれです。だって2日前なんだから、ニュースやなんかで言われてですね、ああ、こういうこともあるんだ、その時は気をつけようねぐらい言うでしょう。その2日後に起きたんですから。これはもう皆さん逃げたに違いないんですよ。一体どれだけの方が助かったのか。これはもう犯罪的行為だと思うんです。彼がですね、

海渡:止めた張本人ですもんね。

島崎:張本人なんですよ。だからそれがまさに私と真逆の人なんです。

海渡:山岡さんはですね、この委員に選任された直後にね、規制委員会のホームページでこう言ってるんです。

「2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震は、私を含む地震学者の予想を超えるまさかの規模の地震で、超巨大地震による被害の凄まじさを見せつけられました」。まだこんなこと言ってるんですよ。ちゃんとその3月9日に公表する予定だった。それを想定外だっていうふうに言いくるめて、それを規制委員になってもずっと言い通そうとしてるとしか思えませんよね。

島崎:まさに真逆を向いている人なんですよ。堂々とかういうことをさらっと言う。

海渡:恐ろしいですよ。

島崎:恐ろしいです。

海渡:はい。ということで、皆さん誰だろうと思われたと思うんで。山岡耕春さんです。ちゃんとこの名前は絶対に忘れてはならないと僕も思います。

先生、ちょっと話が戻りますけれども、まさにですね、2011年の3月に公表する予定だった推本の新版というものです。これがどうして期限通りに公表できなかったのか、その辺、先生のご本で詳しく書かれてるんですけども、お読みでない方もいるかもしれないんで、ちょっと簡単にかいつまんで説明していただけますでしょうか。

島崎:もうその頃は事務局とですね、電力がツーカーになってたんです。裏で。ですから、そういう公表をしようとする時にはですね、電力にこういう公表をしますよと言うんですよ。そうすると電力が、ちょっとこのところを直してくださいだとか、ここはもうちょっと柔らかくしようねとか、勝手なことを言い出して、直したのを公表する。もう事務局はね。もうそこまで墮落してたんです。

それで直そうとするには時間がかかるわけですね、やっぱり。電力に言って、電力が見て、それじゃここはこうしましょうね、ああしましょうねっていう時間が欲しかった。直したかった。だからその日には公表できなかった。

海渡:でも実は先生、このことは先生が東電の刑事裁判で最初出てきて話された時には、スケジュールの都合でうまくできなかったんですっていうふうに証言されたと思うんですよ。だからその当時は、要するに東京電力、電気事業者との間での話の詰めがあって遅れたということは、先生自身をご存じなかったってことですか？

島崎:はい。

海渡:分かってなかったですか？

島崎:結局、3.11は非常に大きな災害だったので、その後もいろんな調査というか、あるいは何て言うんですかね、調べが来て、いろんな情報がその後に入ったんですよ。それでいろんなことが明らかになっていって、実はこういうことがあったんだっていうことがだんだん分かってきたっていうのが実際の状況なんですね。

海渡:先生の刑事裁判の証言と、この津波対策を邪魔した男たちの本で少し違ってくるのは、そういう形でどんどん情報が付け加わっていったという経過がございますよね。実はですね、後をちょっと見ていただいているんですか。これはですね、2009年の10月ですから、原発事故の1年半ぐらい前ですかね。島崎先生が何とですね、東電設計、東電の子会社が主催する講演会で、地震予知の話をされたんだと思うんですけれども、ご覧いただきたいのはですね。ここに座っているのがですね、勝俣さんです。これはですね、先生が名刺を交換されたっていうことでね、記憶があったんで、そういうことをちょっとお話ししてる時にポロっと出てきたんで、そんな重大なことがあるならってことで、本の中でも少し詳しく書いていただいたんですけれども、その後、お家を搜索していただいたら、このDVDが出てきて。これ見てください。ちゃんとしっかり顔が識別できますよね。この時のこと、先生覚えておられると思いますんで。少しひと言ふた言、言葉を交わされたんでしょうかね？

島崎:2つ講演があったんです、この時。それで最初の講演が私で、私の講演が終わった後にもう帰られた。そしてその帰る途中で名刺交換というか、私、名刺持ってないので名刺をもらっただけですけれども。それで、来られたんで。ほかでもいろいろあるんですけれども、彼はすごい熱心に地震のことを勉強してるんですよ。何でも、何でもっていうのはちょっと言い過ぎかもしれないけど、知っていた。だから彼が、そんなこと知りません、と言うのは、もしそういうことを言ったら、それ全部ウソです。彼はものすごくよく知ってます。

海渡:確かにですね、僕も東電の社長といえば、どんな忙しい人か想像がつくわけですがけれども、そういう方がですね、講演会に来て、最前列に座って、お付きみたいな人もついてますけれども、そして先生の講演の方を聞いて、それで帰られたっていうことですから、地震のことをもっと深く知りたい、長期評価のことも念頭にあったかもしれませんよね。

島崎:どういう講演をしたかっていうと、当時われわれはどのくらいの予測というか、予知

とは言いませんけれども、次にこういう地震が起こりやすいだとか、そういうことがどのくらいの確度で、どのくらいのところまで私たちが到達しているかっていうお話をしたんですけれども、本当によく聞いていただきました。そういう状況でした。

海渡:実はこのDVDをよく再生してみるとですね、東電刑事裁判で登場した酒井さんというGMだった人、あの人が出てきてね、先生を困らせるような質問をしてるんですよね。彼が、この津波対策をやろうということを上司に持ちかけて、結局それができなくなった張本人なんですけども、この場でもわりと自分は地震の専門家だぞみたいな感じで質問してます。ご記憶ないですかね。

島崎:すみません、全然覚えておりません。ごめんなさい。

海渡:まあ、それはどうでもいいことなんで。
せっかくなので、津波対策の専門家である添田さんの方から何かご質問は？

添田:先生、地震調査研究推進本部の、特に事務局が、電力会社と仲良くなってしまったその手口というか。土木学会とかはよくわかってるんですけど、推本の事務局が電力会社に取り込まれていったそのやり方っていうか。どういうふうにして、なってしまったもんなんですかね。ご意向を事前に尋ねる仕組みまでできちゃったっていうのは。

海渡:やっぱり2002年の長期評価の時のあのやりとりが、結構僕は決定的なんじゃないかなっていう気もするんですけど。変な前文が付けられてしまった。

島崎:要するに、僕にはよくわからないですけども、そういう何と言ったらいいのかな、グループというか、そういう人たち、あるいは、なんて言ったらいいんですかね。そういうのがあるんですよね。

添田:地震学者の中で、ということですか？

島崎:地震学者の中にももちろん生まれていて、先程言った山岡耕春さんも地震学者ですし。だから…目に見えなかった。僕はだいたいおちょこちょいというか、そういうことは目に見えない人間だったので、分かってなかったんですね。だけど、いろいろ考えてみると、ちゃんといた。

添田:でも2002年の津波地震の長期評価だけではなくて、その後の邑知潟とか、このあいだ問題になった敦賀の浦底とか、長期評価が出るたびに電力会社が徹底して無視するとか、あんなのを相手にしなくていいみたいな動きがあつた頃から一斉に加速するんですけど、やっぱりそうすると、そういういろんなどこにいるグループの人たちが話

し合ってやっちゃったという感じなんではないかな。

島崎: じゃないでしょうかね。ちょっとそっちの方までは手が回らないので。

添田: 私、長岡平野西縁の評価が出た後に、それこそ酒井さんに2006年ぐらいに取材した時に、長期評価なんて全く聞く必要はない、みたいなことを強調しておられたんで、どこでそういう意思決定がされてるのかなと思ってたんですけど。やっぱりグループとしての意思決定が、何らかの形で談合されてたんでしょうね、そうすると。

島崎: そういうことだと思いますよね。

海渡: 今の関係なんですけども、先生のご本の中でですね、東京電力、電力会社と、推本委員会の事務局が裏会議をやった。裏会議をやったってことも、実は先生は御存じなかったんですよ。あの裏会議をやっているってことが分かった経緯と、分かった時にどう思われたかっていうのをちょっと聞いてみたいのですが、

島崎: それは2011年の。その後いろんなことが起きて。みなさんも調べられて、だんだん事実が明らかになってきますよね。あれはどのくらいかかりました？ 6、7年？ 8、9年？ 結構かかったけれども、事実がだんだんだんだん現れてきて。

海渡: Level 7の調査活動によるところが大きいんですよ。

島崎: ああ、そうですね。Level 7がありましたね。というわけで、だんだんわかってきて、それで、ああ…と思ったんですが。その前はですね、知らない。むしろ大変な人を大変だって知らないわけですから。それで向こうはですね、情報を取りたいわけですよ。後から考えてみれば。だからすごい仲良しになってくれる人がいるわけですよ。

海渡: そうだったんですか。

島崎: それで一緒に飯食いにいったりとかですね。馬鹿ですね、ほんと、僕は。けどもそうなんです。だって、情報を取るには、まず仲良しになって、一緒に飯食いにいって、ちょちょっといろんな話をして、そん中に知りたいことも混ぜて、そうすれば取れるじゃないですか。なんてことを僕は全然分かってなかった。だから仲良しになって、やあやあ、今日も飯食いにいこうよとか言って、行っちゃうわけです。いろいろ聞かれると、知ってることをわざわざ隠すことないですからね。いや、これはこうで、こうなっていくんじゃないかなとか何とか、余計なことまでしゃべっちゃう。仲いいはずですよ、向こうは仲良くしたいんだから。本当に馬鹿です、私は。

海渡:今の話はほんと衝撃的ですけども、それが分かったら何かこう、人間不信というか、何かもう嫌になっちゃうとか、そういうようなお気持ちでしょうかね。

島崎:いや、本当にね。仲良くした人がね、あれをしてたんだっていうのがすごいショッキングですね。僕が馬鹿だってことの証明なんですけど、本当に。

河合:先生、素直なんですよ。人間関係において。

島崎:まあ、練れてないんですよ。

会場:本気で推進しようとする側の当然の合理的な情報収集ですよ。今日もいらっしゃるんじゃないですか、手を挙げろとはいいませんが。注目されるべき講演会じゃないですか。ただ、何を学ぶかは、ちゃんと本当に人間として間違えずにお帰りいただきたいですよ。

海渡:そうですね。ありがとうございます。

先生ですね、この大津波のご本というのは、ずっと岩波書店の科学っていう雑誌に連載されてたんですけども、さっき少し河合さんがネタバレみたいにしてしまいましたけれども、先生としては、これは岩波書店から出したかった本じゃないかなというふうに推測するんですが、どうでしょう。

島崎:私は岩波新書っていうのに憧れてましてですね、一回新書を出したいなどずうっと願ってたんですよ。それで1周して終わって岩波さんに、これ、新書にまとめたいんですけどって言ったら、ポーンと蹴られました。

海渡:そうですか。衝撃的ですね。大ベストセラーになったかもしれませんけどね、本当に。

島崎:いろんな方をお願いして、それでやっと出していただいたという次第で。いろいろお世話になりました。ありがとうございます。

海渡:いえいえいえ。

でも僕はですね、島崎先生が本当に偉いなと思っていて、これだけですね、エスタブリッシュの頂点を極めた方で、そして推本にも、そして原子力規制委員会のトップの部分にもおられた方で、でもこういう我々のようなですね、ペーパーの市民団体の講演会に来てくださって、これだけ率直にですね、何が起きてたのか、先生ご自身がよくわからなかったことが後からわかってきたっていうことを話していただくと、我々も全然当時それだけのことが起きてるってことはわからなかったんですけども、初

めて実態がわかったというか。

でも実は、添田さんはその辺の裏を最初から知り尽くしてたような気もいたしますけども。

河合:すみません。僕は3時から柏崎刈羽の弁護士会議で、4時から浜岡の弁護士会議で、5時から関電の弁護士会議があって、私、ここで退席しなきゃいけないんです。先生済みません。

今日の話聞いて、やっぱり日本は地震国なんだよって大地震学者から言われると、改めてそうなんだって思いましたよね。で、今日の先生のおっしゃってることは、あの樋口裁判長の言ってることと同じなんですよ。もう日本が地震大国だっていうところから原発問題を考えなきゃいけない。だからもうやめなきゃだめなんだと非常に単純におっしゃったけど、そのことがやっぱり私たちの運動の原点であり、だから島崎先生のような考え方、樋口さんのような考え方で反原発運動を進めていかなきゃいけないんだっていうことを、改めて原点に戻る必要性を感じました。

どうも先生ありがとうございます。すみません、途中で退席します。

添田:私も正直言って3.11までは、地震学者の方々というのはみんな島崎先生みたいな人だと思ってたんですけど。

海渡:ほんとですか？

添田:いやいや、ほんとにそうです。

電力でやってる人は、ちょっとそれは悪い人がいるな。衣笠さんみたいな例外はちょっと事前から知ってましたけど。

ところが3.11の後、調査してみると、何かやっぱり地震学会ってアカデミックなものだと思ってたんですけど、それこそ活断層の調査とか歴史地震の調査とかって、ものすごく電力からお金が流れてて、それに引っ張られる人もいたんだなということはよくわかってですね。だからその辺が結局仲良くしちゃう人たちを生んでたと思うんですけど、でもそこをなかなかうまく証拠をとって書くのが難しかったのが、先生みたいにスパッと書いていただけると、とってまわりやすくてよかったなというふうに今日は思ってます。ありがとうございます。

島崎:今のご指摘は非常に重要なご指摘だと思います。私の友達にもいるんですよ、たくさん。たくさんいて、非常にいい仕事をしてると思ってですね、何の上だか、すみません、ちょっと思い出せないんですけども、ここに出して発表したらいいいんじゃないのと言ったら、実は…と言っているいろいろ出せない事情があるんだと言われて。何これ？もう私自身はクエスチョンマークの塊で、今言えばそういうことなんですけれども。僕は本当馬鹿で、そんなことは全然分からなくて。うん、そうなんですよね、そうい

う、みんな真面目に研究して調査してやってるように見えて、実際やってるところはあるんだけど、実はそこに裏があったという。

海渡:東電の刑事裁判、株主代表訴訟もそうなんですけれども、土木学会っていうものをどう見るかっていうことが判断の分かれ道で、やっぱり、東電の役員の責任を否定している、国の責任を否定しているような判断では、土木学会っていうのが普通の学会だっていうふうに見てるんですよね。推本の長期評価を出してるのも普通の学者で、土木学会にも普通の学者がいて、っていうふうには思い込まされてるというのか。でも土木学会っていうのは、実は全部のお金が電力会社から出ていて、結論を全部電力会社の言いなりに決まるところで、議事録なんか見てもまともな議論は何もない。先生方がやられていた地震調査委員会なんかは結構活発にいろんな意見が次々に出て、非常にそのアカデミズムというか、面白い議論をされているなというふうに思うんですけれども、その辺のことがやっぱりよっぽどうまく立証活動をしないと裁判所には伝わらない。土木学会に検討を依頼して何が悪いっていう、それが要するに何もしていないってことの言い逃れなんだっていうことを見破れるかどうか。株主代表訴訟の朝倉さんは、そこをはっきり見破ったんだと思うんですよね。だからこそ、ああいう判決が書けたんだと思うんです。だから、アカデミズムがどんなものかを肌感覚で島崎先生に話していただくってことはものすごく重要で、こういう感覚を最高裁にも伝えていかなければいけないし、今ここにはたくさん損害賠償系の裁判をやってる仲間とかたくさん来てると思いますが、こういう話を裁判所に本当に正確にわかってもらう必要があるんじゃないかなというふうに思います。

島崎:土木学会の話が出たのでちょっと言いますけれども、土木学会っていうのはいろいろ問題があるという話がありましたけれども、土木学会に出ている人で、知ってる人がいて聞いたことがあるんですけれども、土木学会で議論しているのと、土木学会の結論って言いましょうか、今回こういうことをしてこういうふうに決めたっていうのとは、まるっきり関係がないんです。やっていることと、結論として外に発表することと、まるっきり関係ないという、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、違うんですよ。あらかじめ何か結論が用意されてるように僕には見える。不思議ですね。変な学会。

添田:土木学会の偉い人に会った時に、土木学会の原子力土木委員会だけが変なところであって、土木学会を十把一絡げにしてくれるなって僕は怒られたんですが。でも原子力土木だけは土木学会の人の中でも、なるべく寄らないようにしようみたいなところらしいです。

確かに、結論が全然違うっていうのは、私、国会事故調で電事連の文書を調べている時に、役員クラスの議事録の中で、津波評価技術のたたき台を作っておいて、それを土木学会にオーソライズさせるという文言があったのを見た時、本当にうわあと思ったんですよね。あれは大発見だったんですけど。そういう形で、もうできてるのを単

にふんふんって言うてもらっただけってというような形で使ってたんだってというのがよく分かってですね。そのつながりが、土木学会ってのはどう使ってたかっていうのがよく分かりました。で、お金もじゃんじゃんみたいな。

海渡:地震調査委員会っていうところはですね、先生が推本の最初の2002年にやられてから、次のこの2011年に第2次を出そうとするまで、随分長い期間、先生は関わられたと思うんですが、徐々に変わっていったんでしょうか。それとも科学的に純粋に議論して、その危険なところを指摘するということでは、ぎりぎりなんとかやれてたんでしょうか。最後に発表が妨害されたってところが、すごく僕らの頭の中では際立ってるんですけども、その辺の地震調査委員会そのものの変遷はどんなものでしょうか。

島崎:ちょっと今、数字を言えなくてなんですけれども、どういうふうに変わっていったかっていうと、やっぱり事務局っていうのは問題であって、我々の言った通りに書かない。我々がこうこうこうしましょうって、もちろん全員が一致していつも同じ意見になるとは限らないので、いろんな意見があって、バラエティーはあるけど、大体こういうところできましようってある程度まとまって、それが発表されるわけですけども。その状況で、人によって強弱というか、ここが強い人と、まあまあまあそうかなあぐらいの人と、こういうでこぼこはしてるんですけど、まあ一応意見がまとまると。その状況で事務局がまとめて出そうとするときにですね、意見を言った人が、そこ違うじゃないの、そこをもうちょっとこうしようよっていうふうに言うわけです。ところが、それじゃあ検討しますって事務局が言って、いろいろもう一回意見を出したりなんかして、それでまたまとめるんですよ。まとめた結果、やっぱり前の人がそこ違うんじゃないですか、こういうふうに言ったのに、何でまた戻っちゃうの、その繰り返しを何回かやる。

海渡:その事務局の背後に、やっぱり電力関係の人の影がちらつくってことでしょうかね。

島崎:そういうことですね。

海渡:なかなか大変ですね。

我々はこの刑事裁判とこの問題の関係で、地震調査委員会では前田さんという事務局をやられた方と、そして濱田さんという気象庁から来られてたお二人とも見てて、すごく実直な実務マンというような感じがしましたけれども、そういう人ではないような、山岡さんみたいな人がはびこるような状態になっていったってことでしょうか。

島崎:山岡さんはちょっと極端ですけども。

海渡：極端ですか。

島崎：少しずつ変わっていったのは事実ですね。どうしてこう書いてくれないのって言う方がいて、僕は、その人はいいい人で、悪くない人で、だけれどもすごくそのことに興味あるわけではなかったの、もうちょっと中立的って言うか、ちょっと無関係の立場で見て、この人はなんでこんなにこのことを強烈に推していくんだらうぐらいに当時思ってたんですよ。分かんなくて。だけれども、何回やっても戻っちゃうんですよ。だからこれはもう今考えれば、明らかにそれを載せたくないっていうものがあったにもかかわらず、でもせつかくこれだけのことが分かったんだから出そうよってというのは繰り返されてたんですよ。今頃になってこんなこと言うのはほんと馬鹿の見本ですけども、僕はそっちの立場ではなかったんで、なんでこれが繰り返されるの？前言ったじゃない、また戻ってきちゃった、っていうのを何度も繰り返すってことやってたんです。今考えれば不思議じゃないけども、どうしても載せたい人と、どうしても載せたくない人がいたってことで妨害してたんです。

添田：それはやっぱり、原発に関わる地震の評価についてだったんですか？

島崎：地震の評価としては、別に原発に関わるというふうなものはなかったんですが、場所がどこだったか……。多分原発に関わったんでしょ。その原発に関わってるっていうことを知らない馬鹿はですね、なんでこれを繰り返したんだらうなど言う。本当に分かんなかった。そういうことです。

海渡：じゃあ、ちょうどいい時間になったと思うんで、最後に先生の方からですね、今日、本当にたくさんの方が聞いてくださったんですけども、あんまり喋りたくないことを今日喋らしてしまったかもしれませんが、こういう機会に来ていただいて、ご感想をひと言言っていたいただければ大変嬉しく思います。お願いいたします。

島崎：皆さん、ありがとうございます。

こんなにたくさんの方が聞いてくださって、皆さん熱心に聞いてくださって、今日60分話そうっていうことになってたんですけども、僕が一番恐れていたことは、30分で終わってしまうんじゃないか、どうしようこれは、と思って、ずっと困ってたんですけども。そうですね。耕春さんの話なんか無駄話というのはなんですけども、

海渡：無駄じゃないですよ。最も重要なことです。

島崎：無駄じゃないですね、ごめんなさい。最も重要なことだそうです。確かにその通りなんですけども。そういう話を挟んで少し長くなって、そういう話を挟んだ方が良かったんですね、実はね。最初の計画には全然なかったんですよ。だから画面にはなかつ

たんじゃないかと思えますけど。ありがとうございます。お陰様でそういう講演ができて。

海渡:僕は、実はですね、先生が言われなくても山岡さんのことは聞こうと思ってたんです。でも最後に出てきたんで、これはシメシメと思って聞いてしまいました。でも、皆さんも頭に刻印されたら、規制委員会はいかに危険な状態になってるか。もう島崎先生と真逆の人がその中心に座っている規制委員会になっているってことが今日の結論じゃないかなというふうに思います。

島崎先生、本当にありがとうございます。こんな我々ですけれども、一生懸命これからは頑張りますので、御指導のほどよろしく願いいたします。

島崎:ありがとうございます。